

古代・中世日本文学に於ける神仙・異界思想の研究

大正大学大学院 文学研究科 国文学専攻 善養寺 淳一

本論文は、大陸に発する神仙思想が、日本文学に如何なる影響を与えてきたのかという受容問題を異界思想も含めて、特に古代・中世文学の諸作品について実証的に解明し、更に、日本神仙・異界思想文学史の構築を企図するものである。目次は次のとおりである。

序論

第一部 奈良朝文学に見える神仙・異界思想

概観 奈良朝神仙・異界思想文学概観

第一章 本朝神仙・異界思想文学前史

第二章 『懐風藻』に於ける吉野仙境観の成立

第三章 『懐風藻』吉野詩に見える神仙思想について

第四章 奈良朝文学に見える他界観念及び境界論

第一部主旨「憧憬的受容」としての奈良朝神仙・異界思想文学

第二部 平安朝前期文学に見える神仙・異界思想

概観 平安朝前期神仙・異界思想文学概観

第一章 『三教指歸』虚亡隠士論の神仙世界

第二章 都良香の神仙思想について

第二章付論『富士山記』の神仙世界

第二部主旨「批判的受容」としての平安朝前期神仙・異界思想文学

第三部 平安朝中期文学に見える神仙・異界思想

概観 平安朝中期神仙・異界思想文学概観

第一章 『紀家集』の神仙譚

第二章 『竹取物語』に見える神仙否定の論理

第三章 『続浦島子伝記』に於ける神仙思想について

第三部主旨「創造的受容」としての平安朝中期神仙・異界思想文学

第四部 平安朝後期文学に見える神仙・異界思想

概観 平安朝後期神仙・異界思想文学概観

第一章 吉備大臣入唐譚方術考

第二章 『本朝神仙伝』の神仙像について

第四部主旨「再編的受容」としての平安朝後期神仙・異界思想文学

結論

神仙思想とは、中国に於いて戦国時代に発生した民間信仰である。その内容は不老不死を目的とし、山岳で修行をし宇宙万物の根元たる「道」との合一を説くものである。その体得者は仙人となる。また神仙思想は道教の核をなす思想でもある。従って神仙思想の展開は道教史の中に見て行かなければならないが、小論に関する部分は日本流伝の問題が重要である。この点について諸家の見解は、日本への伝播は道教の専門家である道士不在の伝わり方であり、系統性を欠く文物中心の伝わり方であることが指摘されている。また日本の古代社会に民間道教（下出積與氏の語）が定着していたことが明らかになっている。

小論は、この神仙思想が我が国の文学作品に与えた影響を考察するものであるが、その範囲は、奈良朝以前を「前史」として平安朝後期までの約五百年間を展観するものである。具体的には『懐風藻』、『風土記』等の奈良朝の作品から、平安朝後期の『本朝神仙伝』に至る古典文学作品について、通時的、多角的に十二の論考によって考察するものである。

本論の形式は、これを時代区分により四部に分ち、各々冒頭に概観、末尾に主旨を配し、各時代毎の作品については、国文学、漢文学を基礎とし、宗教学、歴史学、神話学、民俗学等の知見を以て論じるものである。以下各部、各章の論考の要旨を申し述べておきたい。

第一部第一章「本朝神仙・異界思想文学前史」では、前史として飛鳥時代（政権所在地に基づく時代区分による広義の飛鳥時代で、推古天皇の飛鳥豊浦宮即位（五九二）から、和銅三年（七一〇）の平城京遷都まで）に於ける道教思想問題を扱った。それは①天皇号問題、②天武帝諡号問題、③常世神信仰問題、④斉明帝の土木工事の亀形石造物、⑤飛鳥岡本の宮都の選地の宗教的意味である。これらは当時の道教、仏教、神道が多元的に存在する状況で、国家の宗教政策の規制を受けつつも、奈良朝文学の思想的根元が徐々に形成されていったものである。①天皇号問題では、福永光司氏の論考では「天皇」号が同じ字の中国の天皇（宇宙の最高神）の名であるという点と、天武帝の諡号中の「真人」が『莊子』で人生と世界の根元的真理である「道」を体得した人の意味である点など、天武帝と中国道教との密接な関係が窺える。②天武帝諡号問題では、和田萃氏の論考でその和風諡号に神仙に関係する「瀛真人」が含まれる点が指摘され、③常世神信仰問題では、松田智弘氏により、皇極帝当時の一般民衆の道教信仰の実態が取り上げられている。また④斉明帝の土木工事の亀形石造物は、今枝二郎氏により道教遺跡である点が指摘されている。更に⑤飛鳥岡本の宮都の選地の宗教的意味では、千田稔氏により宮都の選地と神仙思想の関係が指摘されている。このような各分野の諸家から指摘された史実は、我が国への道教流伝が確実にあったことを物語る。それは奈良朝文学の思想的根元と言えるものであった。

第二章「『懐風藻』に於ける吉野仙境観の成立」は、吉野の地が仙境と見做される条件について、下出積與氏の見解に基づく考察である。この成立条件の背景にある問題として重視すべきは、民間道教の内容たる神仙思想に説かれる仙薬・養生法は古代人の歓迎するところであったが、道教呪術は律令政府の厳しい取締対象となっていた点である。本論考では、『懐風藻』の吉野詩の時代区分四期のうち、第二期以降（天武朝以降）の十七篇の分析から、①神仙思想の知識（当時舶載せられた漢籍『文選』の影響が大きい。）、②地形と気象等の風土的条件、③吉野の歴史的条件（壬申の乱に関する革命の聖地としての歴史の意味）、④宗教的聖地としての四条件の上に、吉野仙境観が成立したと考えられる。そこには吉野に滞在した皇族、貴族の仙境憧憬が謳われる。また吉野が仙境と見做される時期は、吉野詩の成立時期の分析から、葛野王・藤原史の生きた七世紀半頃と考えられる。

第三章「『懐風藻』吉野詩に見える神仙思想について」では、渡来系人の医薬の専門家の吉田宜（生没年未詳であるが文武朝から聖武朝にかけて活躍している。）の従駕詩80番詩の詩句「八石」の先行研究を深化させ、仙薬の総称として詩の意味を解釈した。具体的には80番詩の頸聯の季節感の表現は、作者の吉野離宮での実体験と考えられる。この時期に吉田宜が従駕した行幸六回を検討し、天平八年（七三六）六月の聖武帝行幸の際の作と仮定してみると、前年の天平七年には天然痘流行があり、「八石」を仙薬の総称（通常の薬でもある）の意味として、この詩を解釈すると当時の社会問題である天然痘の退散を意識

したものであるということになる。更にこの詩の傾向（仙薬を詠み込む）は、日本人の作者の神仙思想の受容傾向（神仙境や仙女との邂逅を謳う）とはやや異なる点を指摘した。

第四章「奈良朝文学に見える他界観念及び境界論」では、浦島伝説について、『丹後国風土記』（逸文）と『万葉集』を取り上げ、古代文学の他界観念について考察するものである。また、これに附随する境界は、独自の可動的境界の概念を導入し、新たな解釈を行った。本論考ではその成立について諸説ある浦島伝説は、『風土記』（逸文）と『万葉集』を対象とし、『日本書紀』は水野祐氏の所説に拠り参考とした。考察の結果対象の二作品の他界観念では、原始宗教特有の現実世界と他界との親近性が指摘できる。この他界は、具体的には『丹後国風土記』「浦嶋子」の「蓬菜」^{（とこよのくに）}は、天上界とも海中とも宇宙とも考えられる分節化されていない明瞭な輪郭を持たない「天空即海彼」であった。一方『万葉集』「水江浦島子」では、「常世」^{（とこよ）}は、海上、海中二様の世界が考えられるが、「玉匣」の「風雲」^{（かぜくも）}が蒼天に飛び去った点からも、『風土記』同様「天空即海彼」となる。対象二作品では「トコヨ」と神仙思想の習合が見られ、神仙思想の受容により作品内容は、海彼から天上界までの広大な世界が舞台となり、奈良朝の人々の憧憬をかきたてるものとなった。

以上の四篇の論文から第一部の主旨として、奈良朝文学における神仙・異界思想の特質は、前代からの道教思想伝播の上に、神仙・異界思想の「憧憬的受容」と位置付けられる。

第二部第一章「『三教指歸』虚亡隠士論の神仙世界」では空海（七七四～八三五）の儒・仏・道三教の比較思想論における道教（神仙）思想の受容問題について考察を行った。道教を扱った中巻虚亡隠士論は、波戸岡旭氏の指摘のように、その出典の多くは『抱朴子』である。虚亡隠士論本文の出典の分析から、①空海の道教理解は網羅的なものではなく、『三教指歸』の内容・構成に相応しい選択的受容が明らかになったが、これは奈良朝の「憧憬的受容」から「批判的受容」への受容態度の変化が見られる。また②この書の享受者層は、空海が仏教に進むという進路に反対した阿刀大足^{（あとのおたり）}ではなかったろうか。更に、③この書の意義は儒・仏・道三教の比較にあり、そこには空海の批判精神が見られる。また文学作品として対話形式の戯曲構成（思想劇）でもあり、高度な思想的、文学的営為と言える。

第二章「都良香の神仙思想について」は、『本朝文粹』所収の都良香（八三四～八七九）の対策「神仙」について、出典の分析により良香の漢籍受容と道教の理解度を考察したものである。「対策」とは大学寮で行われる「策問」に対する「対策文」の意で、儒家となる者が臨んだ論文試験である。良香は春澄^{（はるずみのよしただ）}善繩の論題に対し形式に則り当帝への賛美をし、正面から整然と神仙の諸問題に答えており、その学識は神仙に至る「道」の本体論にまで及ぶ。この対策文の意義は、神仙思想が公的な官吏登用試験に出題された点にあり、これは奈良時代の否定的姿勢から転じて、神仙への関心が直截に表現されるようになったと言える。良香の道教の理解度も特筆すべき点であるが、そこには神仙世界を包含し、これをも乗り越えた存在である天子の威徳が謳われる点で、神仙思想の相対化と言えるだろう。

更に付論「『富士山記』の神仙世界」では、その文言の典拠と行文を考察し、富士山を素材とした山水記が、良香の日本的仙境の発見に形象化している点を明らかにしている。

以上三篇の論文から、空海・都良香ともに奈良朝文学における神仙思想受容を深化させ、神仙思想の神学まで理解しており、更にこれを対象化しつつ著作に採り入れ、作品では選択的に最適化している。中国の作品に遜色ないものであると考えられる。第二部の主旨としては「批判的受容」としての平安朝前期神仙・異界思想文学と位置付けることができる。

第三部第一章『紀家集』の神仙譚は、紀長谷雄（八四五〜九一二）の「白石先生伝」について、有限な生の人間と無限の生の神仙との対比から、神仙思想受容が相対化されていた点を考察した。紀長谷雄はその出生に纏わる話が『長谷寺験記』に収められ、また靈験譚は『今昔物語集』にも取り上げられている。『紀家集』の神仙譚「白石先生伝」に登場する白石先生は、役人の貪欲な様を見て官も妻子も捨て、山に入り古い墓に住み溪流に往き水底の大小の石を拾い、これを積み上げる生活を送っている。後年、先生に役所から再度徴召があったが狂人を装いこれに応じなかった。先生は何ものにも縛られることなく清廉を貫き、その終わる所を知らなかったという仙人的な終焉であった。この先生の生き方には、学者としての長谷雄自身の生涯が投影されているものと考えられるが、私見では村上嘉実氏が指摘する中国の隠者の生き方に類似している。先生の生き方は役人の貪汚とは対極的なものであるが、そこには神仙（天上界）を象徴する白石を河畔（地上）に積むことで、世俗から脱しながらも昇天せず、己の理想世界に到達した「地上の仙人」の姿が窺える。その行為は世俗的価値を否定した理想の境地に到達した所業としての無用である。

第二章「『竹取物語』に見える神仙否定の論理」では、『浦島子伝』（『丹後国風土記』）と『竹取物語』との比較構造的考察により、両者の構造の対照性と時間性・空間性の対照性を究明し、特にこの構造的枠組みが、『竹取物語』の特色たる神仙否定の論理に繋がる点を見出した。巖紹壘氏は江戸時代の国学者加納諸平の『竹取物語考』に関する見解で、『浦島子伝』のような古代漢文伝奇は、「物語」形成の直接の基礎を提供したと述べている。諸平は『浦島子伝』と『竹取物語』との構造比較をしているわけではないが、私見では『丹後国風土記』（逸文）「浦嶋子」がこれにあたるのではないかと考え、両作品の構造比較を行った。その結果『竹取物語』は、「浦嶋子」の陰画（ネガ）と言える程に鮮やかな対照が見られた。つまり構造的には「浦嶋子」をほぼ反転した作品が『竹取物語』となる。両作品について比較すると往訪譚と来訪譚という基本的な対照的構造が見られ、10項目の比較からその共通点と相違点が明らかになった。この比較により両作品の主たる舞台は異界と現世という対比になり、このことは『竹取物語』の神仙否定の論理を支える構造的枠組みとなっている。私見では『竹取物語』の構造は、天上界と人間界の断絶と考えられ、両者の間で「人間化」したかぐや姫が苦しむという構図が読み取れる。人間化した姫は人間界の所業を「あはれ」と感じ、ここに神仙否定の論理を見出すことができる。

第三章「『続浦島子伝記』に於ける神仙思想について」は、坂上高明が加注を施した『続浦島子伝記』の所謂「伝」の部分の『抱朴子』受容に絞って考察した論考である。考察の結果、『抱朴子』受容とその引用には、「断章」以上はかなり正確な神仙思想の理解があり、それを粗筋に合わせ効果的に配置したことが窺える。坂上高明については後藤昭雄氏の研究から実在の人物とし、この人物が『続浦島子伝記』の施注者の「坂上家高明」と同一人物であることは間違いないであろう、ということが指摘されている。神仙思想集大成の書『抱朴子』の重要性は言うまでもないが、この作品について渡辺秀夫氏の「『続浦嶋子伝記』略注」を基に、『抱朴子』の出典とその内容、更に『続浦島子伝記』の何処に配置されているかという考察を行った。その結果、本文全六段落のうち特に第四段に於ける『抱朴子』の引用は、A 神仙の能力、B 神仙になれる仙薬の製法と薬効、C 神仙を目指す場合に問題となる素質と倫理、について順序立てて引用し、配列を行っているということが明らかにになった。これは中国の神仙思想を正面から扱ったものとして注目に値する。

このことは作者の神仙思想の理解度が、中国のそれに等しく正確であることを示している。第二部で述べた平安朝前期に至り、神仙思想の批判的受容が見られたが、批判の前提としての相対化の流れは、第三部の平安朝中期に至り新たな創作へと向かう原動力となった。第三部の主旨は、「創造的受容」としての平安朝中期神仙・異界思想文学と位置付けた。

第四部第一章「吉備大臣入唐譚方術考」は、吉備真備（六九五～七七五）の入唐譚（『江談抄』）につき、その①異界への越境と方術の思想的源泉や役割、また②作者大江匡房（一〇四一～一一一一）の異界への関わりと院政期文化の複合的様相、更には③儒学者という枠に収まらない新たな匡房像への照射、を考察したものである。①異界への越境と方術の思想的源泉や役割については、唐土に渡った吉備大臣が、諸道、芸能に広く通じ聡恵であったため、唐人の不快感を買い楼に幽閉されてしまう。これは両国のプライドの衝突であり、両者の緊張関係の中で話は展開してゆく。聡恵な大臣に勝てない唐人は難題を大臣に課し、恥をかかせる企みを画策するが、この危機に現れたのが鬼（安倍仲麻呂の幽鬼）であった。大臣は隐身術、見鬼術、飛行術、止瀉術を駆使し難局を切り抜けるが、最後の難題は未来記「野馬台詩」の読解であった。さすがの大臣も窮地に陥り日本の住吉大明神・長谷寺観音に祈念すると一匹の蜘蛛が降り、その糸を頼りに見事に読解ができた。唐人は大臣を再度楼に幽閉するが、大臣は唐土の日月を封じ込める秘術を使い、無事に帰朝することができた。この入唐譚に於ける方術は、i 唐土対日本の対立軸に介在し話の展開を左右し、ii 現世対異界という対極的な両界の通行手段という二重の働きをしている。②作者大江匡房の異界への関わりと院政期文化の複合的様相では、終末思想主流の不安要素の多い時代背景の中であり、それは日本陰陽道形成の頂点をなす時期でもあった。また、③儒学者という枠に収まらない新たな匡房像への照射としては、仏教を深く信仰し、我が国の神仙の事績を記録し、また陰陽家として改元勘申を行った多才な儒学者であったと言える。

第二章「『本朝神仙伝』の神仙像について」では、仏教的神仙が描かれる『本朝神仙伝』につき、神仙思想変容の要因を探るため、井上光貞氏が述べる本仙伝収載の特色のうち、(三)超越的呪力、(四)深山の原始的な生活、(五)断食と仙薬服用、に該当する神仙十八名について、『本朝神仙伝略注』として稿者の見解を加え考察を行った。仏教的神仙出現の要因として、院政期の政治体制による社会不安や末法到来等の仏教信仰の新展開、信仰生活の重層性の問題、また藤原明衡以来高まる本朝意識等の諸要因がある点を述べた。特にこの仙伝が、「本朝」を冠しているのは、匡房の（本家中国に対する）「本朝的神仙思想」と言うべきもの、「本朝的神仙境の拡大」、「本朝的神仙道の発見」、「本朝的神仙像」の造形）があったと考えられる。それは院政期という不安な時代に和漢に亘る該博な知識を持ち、重層的信仰生活を送った匡房の精神生活の形象化と言える著作ではなかったかと考えられる。

以上二篇の論文からは、吉備大臣入唐譚のような「異聞」や日本の神仙の行状を収録するという「集成」或いは「類聚」という文学的営為という点が導ける。よって第四部主旨は、「再編的受容」としての平安朝後期神仙・異界思想文学と位置付けることができる。

ここまで本論考の各部、各章の要旨を述べてきたのであるが、小論で明らかになった点は、我が国に流伝した道教の中核的要素たる神仙思想は、古代から中世まで長期間にわたって日本文学に影響を与え続けてきたということである。それは時代が下るにつれて質的な変容を見せつつ、各時代毎に様々な文学作品の思想的源泉であったという点が指摘できる。今後は、小論を踏まえての「日本神仙・異界思想文学」の確立が望まれるところである。